

# 患者の苦しみや不安を取り除くことを徹底的に追求していく

医療法人社団志晴 富田呼吸器・アレルギー内科医院

理事長・院長 富田和宏

喘息やアレルギー疾患の治療に力を入れる「富田呼吸器・アレルギー内科医院」（静岡県浜松市）。期待される治療結果をしっかりと出し、患者の不安や喜びなどの気持ちに共感してきたことが、地域の人々の信頼につながっている。初診患者は年間2,600人超にものぼる。理事長・院長の富田和宏氏に話をうかがった。



## 徹底的な問診で病気の根本の原因を探る

—— 実際、開業して2年目ということですが、どれぐらいの患者さんが来院されていますか。

**富田** 開業当初から予想以上の患者さんに来院いただいています。事業計画では5年目で1日60人と設定しましたが、現時点で1日80人弱、さらに年間約2,600人以上の初診の患者さんに来ていただいています。

患者さんの疾患のほとんどは喘息、咳喘息の方で、続いて多いのが鼻炎などのアレルギー疾患です。あとは少数ですが風邪などの急性疾患の方もおられます。年齢層については、中学生から中高年の方、高齢者の方と幅広い方々が来られています。

—— 当初から多くの患者さんに支持されている要因をどのように考えておられますか。

**富田** 当院の強みは呼吸器疾患やアレルギー疾患に適切に対応でき

るところにあります。たとえば、風邪をひいて咳が止まらないという患者さんに対して、一般のクリニックの場合は、鎮咳薬を処方することが多いと思います。この鎮咳薬というのは、非特異的治療薬といわれ、要するに中枢神経に働きかけて咳を止めてしまうものです。つまり、咳が出ている原因を治療しているわけではないのです。

当院では、「どうして咳が出ているのか」ということを重視し、鼻水が喉に垂れて咳が出るのか、肺に炎症を起こして咳が出るのかななどを、診療のなかでしっかり患者さんから話を聞いて、原因を特定した上で、その特異的治療を行っています。その結果、症状の改善が早いのです。

こうしたことが当院の実力として認められるようになり、口コミで広がっているのではないかと考えています。

—— 根本の原因を問診で見つけ出し、適切な治療を行い、結果を出しているということがポイントの



外観

医療法人志晴 富田呼吸器・アレルギー内科医院

〒430-0906 静岡県浜松市中区住吉一丁目41番19号

TEL:053-412-2222 FAX:053-412-2223

診療科目:呼吸器内科・アレルギー科・内科

診療時間:

●月・火・木・金/9:00~12:00、15:00~18:00、●水/9:00~12:00、●土/9:00~13:00

理事長・院長 富田和宏(とみた かずひろ)

平成4年、千葉大学医学部を卒業後、同大学附属病院呼吸器内科入局。県西部浜松医療センター呼吸器科、君津中央病院内科などでの勤務を経て、平成9年に千葉大学医学部大学院分子遺伝学、平成13年に博士号学位取得。平成15年に聖隷浜松病院呼吸器内科主任医長に就任。平成26年、富田呼吸器アレルギー内科医院を開業。日本呼吸器学会専門医・指導医。日本アレルギー学会専門医等。

1つといえそうですね。

富田 そういう意味では、“しつこい”といわれるほど問診を行うことがキーワードになっているかもしれません。ただ、それを私が行っていると診療時間がなくなってしまうので、スタッフがあらかじめ問診を行い、その記事を見て、見落としがないかを私がダブルチェックする体制をとっています。

患者さんも、一度、自身の症状についてスタッフに話すことで、頭が整理されます。すると、診療室で、「さっきは言い忘れたけどこういうこともある」などという話が出てくることがあります。

とにかく、スタッフの問診と診療室でのダブルチェックが、より患者さんの状態の把握につながり、適切な診断、治療に結びついているということです。

幼少期に苦しんだ経験から  
喘息・アレルギーの専門医に

——そもそも喘息やアレルギー疾患などに力を入れようと考えられたのには、何か理由があったのでしょうか。

富田 実は、私自身がひどい喘息を患い、小学生時代の思い出といえば、天井を眺めていたことしか記憶にありません。「これからの自分はようになってしまうのだろうか」「この苦しみは一生続くのだろうか」「このまま喘息で苦しみ、

発作を起こして死んでしまうのだろうか」など、大きな不安を抱えながら幼少期を過ごしてきています。次第に、喘息という病気を知りたい、自分自身の身体のことを理解したい、そして、私と同じように悩んでいる患者さんの苦しみを

とってあげたいと考えるようになり、医師を志しました。学生時代もこの想いはブレることなく、千葉大学医学部を卒業後、迷わず呼吸器内科の道を選択し、大学院でもアレルギー・免疫を専門とする研究室を選びました。

その後、さまざまな病院での勤務を経て、開業前は、この場所から程近い、聖隷浜松病院に勤めていました。そのまま、病院で喘息の患者さんを診ていくという選択肢も考えられましたが、病院だと入院患者を診ることの比重が高く、私がやりたい外来で喘息の患者さんを1人でも多く診察する医療に時間をかけることができないということがたびたびありました。

勤務医を約20年間、続けてきましたので、その役割は十分に果たしてきた。これからは、自分の想いを実現するための医療を追求していこう。そう思い、平成26年に喘息・アレルギー疾患を中心とし



納得のいく説明を行うためさまざまな説明用資料を用意

たクリニックを立ち上げました。

「説明」と「納得」が  
患者の治療参加につながる

——幼少の頃、喘息に苦しめられた経験が富田先生の原点なのですね。患者さんに対して、心がけてきたことはありますか。

富田 「説明」と「納得」を意識的に実践してきました。

たとえば、風邪を引いて咳が止まらないという患者さんに対して、「あなたはこういう理由から肺に炎症が起きて咳が出るのです」ということをわかりやすく説明する。すると、患者さんは、「自分はこういうことから咳が止まらないのか」と納得します。そして、「だからこういう効果のある薬を出しますね」と説明する。さらに患者さんは納得する。すると、治療薬もしっかり使ってくれる。結果、症状の改善が早くなるわけです。また、納得したということは、

「理解した」ということでもありますが、当院の説明は「わかりやすい」という評価にもつながることになります。

勤務医時代、クリニックで診てもらったけれど咳がよくなるという患者さんがたくさんいました。話を聞くと、なぜその薬が出されているのかを理解している患者さんはほとんどいませんでした。当然、原因もわかっていません。それでは症状はよくなると思います。患者さんが積極的に治療に参加できないからです。そういうことが当院ではないようにしたいと考えました。

——一言で、「わかりやすい説明」といっても難しいところもあると思いますが。

**富田** 当院では説明用ツールをたくさん用意しています。医療模型を使うこともありますし、国や関連学会などがまとめているガイドラインや資料を独自にわかりやすく編集し、それらを見ていただきながら説明を行っています。

あとは、患者さんに納得していただくために、数値で説明することもあります。

たとえば、当院では、喘息の診

断の目安となる好酸球性炎症の数値を測定するNO測定機器を備えています。この数値を見せて、「この値が高いから咳が出るのです」と説明し、次回、来院した際にもう一度、検査し、「数値が下がっているからよくなっている」ということを数値から確認できるようにしています。そのことも患者さんの納得につながります。

ちなみに、この検査は診療報酬上、1人当たり月1回算定できるのですが、当院では2か月間で1,000回近い実績があります。これは全国でもトップレベルの検査数です。それだけ、咳の患者さんがたくさん来ているということでもあります。利益はほとんどありませんが、患者さんの診断、治療をしっかりと行うために実施しています。

### 自分も“患者”だからこそ患者の気持ちがわかる

——地域の方々に支持されている要因としては、先生のこれまでの病歴も大きく関係しているのではないのでしょうか。

**富田** 私は喘息だけでなく、アレ

ルギーもたくさん持っていて、いまだに花粉症や食物アレルギーに悩まされています。当院の患者さんと比べても、私の症状は相当に悪いのです。だからこそ患者さんの苦しみや状態がよくわかります。

たとえば、患者さんから「胸がかゆい感じ」「重い感じ」と曖昧な表現でいわれても、実際に病気を経験していなければよくわからないと思います。しかし、私ならどう感じるのかがすぐにイメージできますし、気持ち的にも共感できるのです。

先日、患者さんの症状がよくなったので、「本当によかったですね。嬉しいよ」と話したところ、その患者さんから、「一緒に喜んでくれたお医者さんは初めてです。何だか嬉しいです」といわれました。意識して発言したわけではありませんが、思い返すと、他の患者さんにも同じようなことをいっていました。苦しさがわかる分、よくなった時の嬉しさもわかるのです。共感できることが患者さんの満足度に少なからずつながっているのかもしれない。

——限られたスタッフ数でたくさん患者さんを診ていくために工



レントゲン室



好酸球性炎症の数値を評価するNO（一酸化窒素）測定器

夫していることはありますか。

**富田** 現在のスタッフ体制は、看護師が2人、受付や医療秘書が3人となっています。優秀なスタッフばかりで本当に助けられています。受付スタッフの処理能力も日々、上がっていますし、診療補助のスタッフもサポートが早くなっています。

そのなかで、去年からいかに1時間で患者さんを効率的に診ることができるかという練習をしまして、それまで1時間に12人だったのが、今では初診の患者さんがいなければ17人ぐらいまでは可能になりました。

あとは、これまで診療の予習を欠かさず行ってきたこともあげられます。前日の夜に次の日の午前の患者さん、当日朝6時半頃から午後の患者さんのカルテを見直して、症状などを確認し、前回までの症状の経緯をまとめ、その患者さんはどのようなバックグラウンドを持っているのかを頭に入れた上で診療に臨むわけです。患者さんがドアを開けて入ってきて椅子に座っていただいた瞬間に話ができるようにしています。

——診療の効率化ということにも取り組んでこられたのですね。

**富田** 開業当初は、全スタッフを集めて、前日に、翌日のすべての患者さんの申し送りを行っていました。

今は、患者数が増えてきたので、スタッフ各自で翌日の患者さんの予習をしています。検査をする患者さんは誰なのか、前回の検査結果はどうだったのかなどをしっかりと確認しておく。これは効率的に診療を進める意味と、患者

さんからいつ何を聞かれても答えられるようにするためにです。

——開業すると新しい知識やスキルが手に入りにくい環境になるともいわれていますが。

**富田** 開業医の個々の努力が必要になると思います。

私は、関連学会には極力、参加していますし、今年は、薬局と共同で吸入指導をテーマに学会で発表しました。新しい技術、知識は常に学び、必要なものは自院に取り入れていかなければならないと考えています。特に、当院のような専門性を武器にしているところは不可欠なことだと思います。

開業医にとって日々、診療を行いながら学会で研究成果を発表することは非常に大変なことです。今回、改めて実感しました。でも、こうした頑張りを患者さんにアピールすることも、信頼を得るために大切なことです。自分に負荷をかけて、来年も研究発表を行おうと思っています。

## 医療理念「抜苦与楽」は 医師だからこそ実現できる

——医療理念などは掲げておられるのですか。

**富田** 「<sup>ばっくよらく</sup>抜苦与楽」です。“苦を抜いて楽を与える”という意味の仏教の言葉です。まさに医師の役割と同じだと。医師だからこそ、この言葉を実現できると考えていま



クリニックに入っすぐのところに設置している感染症患者用の診療室

す。この「抜苦与楽」を実現するために、自分ができることをとにかく徹底してすべてやってきたつもりです。それが今、結果としてついてきているのではないかと考えています。

——これまでお話をうかがい、先生は「患者目線に立つ医療」を実践されてきたと感じました。

**富田** 患者さんの状態を問診により正確に聞き出して、診断を行い、その治療を適切に行うこと。その上で、患者さんの気持ちに共感し、寄り添うこと。医療の質と気持ちの2つの側面からサポートする医療を提供していくことが「患者目線に立つ医療」だと考えています。

当院の目標は、喘息、アレルギー疾患において、この地域で一番、信頼されるクリニックになることです。自分が悩んだ病気で苦しんでいる患者さんを1人でも多くよくしてあげたい。これからもその気持ちは変わることはありません。

(平成28年5月26日：取材協力・税理士事務所かとう会計／本誌編集部 佐々木隆一)